
アンノウン・エンジェル ～紅八蒼ヨリ赤シ～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノウン・エンジェル ～紅八蒼ヨリ赤シ～

【Nコード】

N0299E

【作者名】

雨月

【あらすじ】

人生に落とし穴はつき物……そして、その前には必ず罠が！これは罠にはまった青年（17歳）が行き着く果てに見るものをおつていく？お話。

ブログ兼第一話 蒼疾専用トラップ（前書き）

さて、はじめての方もはじめてではない方もこんにちわ！作者の雨月です！この作品は……………え？こっいうのはあとがきにやるものだつて？こ、こほん……………失礼しました！

プロローグ兼第一話 蒼疾専用トラップ

プロローグ兼第一話

「はぁ……………はぁ……………」

漆黒の闇の中を少年が走っている。

「……………はぁ……………」

いや、もう十七歳なので青年だろう……………とりあえず、その青年が疾駆する。本日、彼の妹の誕生日で……………わがままながらも慕ってくれているので彼は妹のために誕生日プレゼントを買ってこようとしたのだ。

「しっかしまあ、僕も馬鹿だよなあ……………家に財布忘れるなんて

……………」

青年……………天道時蒼疾てんとくしやうはそういつて暗闇の中を再び失踪するのであったが……………」

「ん？」

彼が失速したのはわき道にちらりと見えたものだった。

完璧に足取りが止まり、急いでいるのにもと来た道を戻ってしまふ。暗い道明かりの外灯に照らされていたもの……………それを確認するため少年は戻ったのだった。

「こ、これは……………」

道端に落ちていたもの、それは……………十八歳以下はお断りのB O OKだったのだ！青年をいざなうかのように年上のお姉さんが流し目を彼に送っている。

「ぐ……………今、抱持ってないからな……………もって帰ったらばれちゃうかも……………」

首を振る少年だったが、お姉さんの流し目攻撃は予想以上の攻撃力で彼の頭の中から怒っている顔の妹が押し出されてしまった。そして、青年はよくある葛藤に襲われ、もたえる。苦しみの末に彼が下した決断は……………」

「やっぱ、もつたないよな……………リサイクルリサイクル」

ちなみに、彼が行った行為は厳密に言うところサイクルではなくリユース（再使用）であろう。

しかし、まさかこの本が後に彼の人生を予想以上に壊してしまうとは誰も……………それこそ、エッチな本の表紙を飾っていたお姉さん……………知らなかっただろう。

エッチな本に手をかけたその少年は今になってようやく気がつく。
「ん？」

自分を見ていたその存在に……………

「うわああああああ！！！」

そして、気がついたときには青年……………蒼疾は既に段ボール箱の中に押し込まれており、彼の叫び声など誰の耳にも届いていなかった……………いや、聞いていたとしてもエッチな本の表紙のお姉さんぐらいだろう……………

「ふ、うまく言ったな……………」

青年をダンボールに押し込んだ人物はエッチな本を手を持ち、それをダンボールの上に置き、その場から消えてしまった。そして、蒼疾は次の日から行方不明となった。

プロローグ兼第一話 蒼疾専用トラップ（後書き）

えゝでは、仕切りなおしてこんにちわ！作者の雨月です！さて、第一話どうだったでしょうか？そして、えゝと、もう一年以上前にこの小説でここにデビューしましたが……まあ、面白かったのならこれ幸いってところでしよう。当時のことを知っている方、そして読んだことがある方など……教えてくれると嬉しいなあと思っています。勿論、今回は新作として発表させていただきま

第二話 エンジョイ！フライ！

第二話

「あいたた……………え？」

ダンボールからなんとか抜け出した蒼疾は気がつけば自分が裁判所の証言台に……………いや、被告側に座っていることにはじめて気がついた。

がやがやとした声が聞こえてきており、それに対して嫌気が差してきたのか、裁判席に座っている人物は木槌を打ち鳴らす。

「……………えゝ静肅に！これより、判決を言い渡します！」

裁判長は女性のように、彼女と同じ高さの席に六人が綺麗に座っているようだ。中央の裁判長は背中に赤い……………いや、紅い翼を生やしており、他の六人は白い翼でどの人たちも個性あふれる仮面をつけて静かに法廷を見下ろしていた。

「……………天道時蒼疾を牢屋に放り込むことを決定します」

裁判長は嬉しそうにそう告げる。そして、なんだか軽いノリで決められてしまったことに憤ることも出来ずにせつかくダンボールから出た蒼疾の脇には背中から白い翼を生やした警備員二人組みがやってくる。あつという間に脇を押さえられると彼らは蒼疾を持ってどこかに連れて行くとした。

「ま、まってよ！僕は何で！何で……………」

何もわからずに彼は赤いじゅうたんの上を宙に浮いたまま連れて行かれる……………とおもったのだが、いきなり一つの影が彼らの前に立ちふさがった。

「ぐわっ！」

「がはっ！！！」

その影はあつというまに紫色の棒のようなもので二人の警備員を即座に殴打。彼らは急所に攻撃を加えられたことでその場に倒れてしまったのだった。

「まったく、いつもここは力で解決しようとする……だから、私は嫌いなのだ」

頭のよさそうな印象を受ける男がそう呟く。そして、書類にペンをどこからか取り出すと男は蒼疾へとその二つの道具を渡す。

「え？」

「ここから抜け出したいんだよね？空を飛ぶには翼が必要……今の君が使える方法は飛び降りて人間界に戻るぐらいさ。だから、この誓約書に悪いけど住所、名前、電話番号……ここの感想を書いてくれないか？」

絨毯の上で構わないからさと男は呟くと廊下の先のほうを見る。

つられて蒼疾もそちらを見たのだが警備員が波となつて押し寄せてきたのだった。

「ひっ！」

「おつと、あわてないあわてない……君がその書類に記入している間、僕はここで彼らの相手をしてあげてるからさ……ゆっくり書いてくれたって構わないよ」

男はそういうとわーっ！といういながら押し寄せてくる……

と、防火シャッターらしきものが上から降りてきて警備員たちが蒼疾の前にやつてくることを阻んだのだった。

「これで大丈夫……書いたかい？」

まったく相手なんてしていない男はそんなことを後ろにいた蒼疾にたずねる。

「あの、ここの感想って？」

「ああ、ここは天界の裁判所……君の素直な声を聞かせて欲しいんだ。まあ、受付のところにも感想を書くところがあるんだけどね」

男のわかりにくい説明によるとこの裁判所についての第一印象をその欄に書いておけばよいようだ。蒼疾はとりあえず率直にその紙にペンを動かす。

『理解不能』

「だろうね」

男はそうやって笑うと蒼疾から紙とペンを返してもらうとこれまた近くの扉を開けた。扉には『危険！開放禁止！』と書かれているのだがお構いなしだった。

「じゃ、また会うかもしれないけどそれまではいばい！」

「う、うわあああああああああああああ！！！」

男は蒼疾の背中を強く押し、暗黒の暗闇に蒼疾をたった一人で旅立たせたのであった。勿論、蒼疾は叫び声を発しながらただ真っ暗の空間を一人で堕ちていった。行き着く果てがどんなところであっても、彼はこの叫びを止められないだろう。

『呟け！』

「な、何を？」

叫び声をあげるだけの蒼疾に変化が起こったのは男に落とされてどのくらいたった後だろうか？そんな声が聞こえてきたのだ。

『わからぬならば復唱せよ！……………紅き翼を持ちたい！と！』

「あ、紅き翼を持ちたい！」

蒼疾は言われたとおりにただそう呟く……………ただ、呟きにしては相当声が大きかったのだが……………とりあえず、それは成功した。

「……………うわっ！！！」

落ちる感覚はなくなり、代わりに浮遊感を感じる。

「え？」

気がつけば自分の背中からは紅い翼が生えており、それが羽ばたくということはないのだがそのおかげで間違いなく落下がゆっくりとなっていた。

「……………」

下にはよく見知った光景が広がっていたのだが……………

「雪！？！」

自分と共に地面へと向かっているものをその視界に捉えると今の季節が冬であるということをいまさら知った。どうやら、クリスマスが間近のようだったのだが……………蒼疾がエッチな本の罫にかかったのは七月の初めぐらいだったはずなのだ。

「…………あれから…………ええと、八、九、十、十一、十二…………五ヶ月もたったのかな？」

そういいながらこの光景を人に見られたらまずそうだったので蒼疾の町の近くにある錆びれてしまった町のほうへと向かった。そこには不良たちがたまっていることが多々あるのだが、街の人たちよりは幾分ましのような気がしたのだ。

そちらのほうに行きたいと思えば自分もその方向にいけることに気がついた蒼疾は急いでゴーストタウンと化したその町へと向かったのだった。

「…………五ヶ月なんかじゃない！一年以上たってる！」

寂れてしまっていた町にも勿論、コンビニなどがある。不良のたまり場となっていて、店員も不良だったのだが蒼疾は気にせず大声を出した。

「……………」

ふらふらとしながら歩き出し、そんな茫然自失とした蒼疾を不良たちは見逃していなかった。

「なあ、兄ちゃん！クリスマスプレゼント代が欲しいんだ！俺たちのサンタに鳴ってくれねえか？」

そんなことを不良たちが言ってくる…………だが、蒼疾はそれを無視して歩を進める。

「おい！聞いているのかよ！」

蒼疾に手をかけようとするが…………その前に、その手がつかまれ、不良が壁に叩きつけられる。

「ぐへっ……！」

「え？」

別に蒼疾が手を出したわけではなく、他の誰かがその不良を吹き飛ばしたのだった。

「へえ、人間界で久しぶりに同種を見るな……っておもったけど…………どうかしたのかい？」

「え？」

再びそう呟く蒼疾が声のしたほうに視線を送るとそこにいたのは見た目が蒼疾よりも二歳ほど幼そうな女の子だった。

「くそ！エンジェルか！今日こそこの前の財布を返してもらうぜ！
いけ！野郎共！」

「くくく おーっ！」「くくく」

不良たちがいつせいに女の子に襲い掛かる……………多勢に無勢だ
とおもっていた蒼疾だったが、その常識は吹き飛んでしまった。

「くそっ！せめて動きを止めろ！」

参戦せずに後方で指令を出している不良が別の指令を出した。他の不良たちは言われたとおりにそれぞれが女の子の足や手に群がろうとしたのだが……………

「無駄無駄無駄！このあたしをとめたいのであれば……………」

少女は何か手にしており、それは紅く輝く。彼女が一閃しただけで向かってきた連中はすべて気絶してその場に倒れ付いたのだった。
勿論、後方の不良までも……………

「……………ビデオカメラでとって静止ボタンを押すことだね！」

第三話 不良と遊ぼう！

第三話

他の不良と共に気絶してしまった蒼疾がようやく気がついた。

「お、気がついたかい？」

「おわっ！！」

女の子は蒼疾に馬乗りになっている状態であり、何故か自分のシヤツのボタンを開けている途中だったのだ。

「な、何してるんですか！」

あわててやめさせようとするが彼女の手は止まらない。

「おっと、ちよつと怪我とかしてないか調べたりしてるんだよ、邪魔しないでくれ」

「怪我？」

「そう、あたしのあの技、食らっただろ？」

思い出そうと努力する……………そういえば、彼女が何か啖呵を切ったのを思い出すが詳しくは思い出せない。

「さすがに同種にそんなことするのは気がひけるし、見たところ不良って柄でもない……………可愛い僕ちゃんって所だろうっておもってね」

細めでじーつと蒼疾の顔を見る。そんな経験が殆ど無い蒼疾は困ったような顔をして結局、最後は目をそらしたのだった。

「ま、どこか痛むのなら教えて欲しいんだけど？」

「えーと、大丈夫です」

「無理してないかい？」

「ええ、今のところは……………」

未だに馬乗りになって抱きしめようと思えば抱きしめる範囲にいる彼女を意識しないように蒼疾は口を開く。

「ええつと、助けてくれてありがとうございます」

「い、いやいや、礼なんていいよ！あたしは別にあんたを助けよう

としたわけじゃないんだからさ！……………ところで、名前はなんていうんだい？」

女の子は興味深そうに蒼疾をじつくりと見ている。

「ええと……………天道時蒼疾」

「蒼疾か……………」

「とりあえず、ありがとうございました！」

目の前にいるのだが頭を下げ置くことにしたのだが……………

「そ、そういうされると照れるな……………」

目の前の女の子は礼を言われることに対して慣れていないようで、顔を紅く染めていたのであった。そして、妄想を炸裂させている蒼疾も顔を真っ赤に染めている。

「え、え〜と、あなたの名前を教えてくださいませんか？」

「え？あ、あたしかい？あたしの名前は……………風華さ……………岡野風華」

「風華さんですか……………」

自分より年下のような話が話し方、落ち着いているその態度が蒼疾よりも上っぽい感じを匂わせていた。

「風華さんはここで何をしているんですか？」

ちよつとぼろぼろのアパートのような部屋を蒼疾はきよろきよろと見回した。そして、自分がベッドの上にいるということに気がつき、改めて顔を真っ赤に染める。

「ああ、ごろつきみたいなことさ……………不良を襲っては財布をくすねたりしてる……………ついでに、犯罪者となっちまった連中は警察の前に転がしてきてる」

「……………いいことをしているんですか？」

そういうといやそうな顔をする風華。

「いいや、言つたら、ごろつきみたいなことをしてるって……………さつきも言つたけど、蒼疾を助けたのは興味を抱いたから」

「興味？」

蒼疾は自分の体を見渡す……………だが、別におかしいところは……………

…いや、あつた。

「この、翼のことですか？」

「そう、それ」

不良のかたがたもこういうものをつけていたのだが蒼疾はその中でもおかしい姿だったのだろう。

「え」と、この翼のことを知っているんですか？」

「まあね。蒼疾は知らないの？」

首を振る蒼疾に風華は成る程と軽めに頷いた。

「あの、嘘だつて言ってくれても構わないから僕の話、聞いてもらえませんか？」

蒼疾は彼女にこれまでであった本当のことを話した………ちなみに、蒼疾の話はダンボールに入れられたところから始まった………話し終わると、聞き手になっていた風化は彼に告げる。

「家、行ったのか？」

「え？」

「蒼疾の家だ………今頃やれ行方不明だ！やれ誘拐だ！とかになつてるんじゃないのか？急いで行ったほうがいい」

今まで気がつかなかったことを風華に言われる。そういえば………

………といったところだろうか？

「そ、そうですね………」

立ち上がるうとする蒼疾を風華が止める。

「………ところで、一つ聞きたいことがあるんだけど？」

「え」と、何ですか？」

「蒼疾君は何に釣られて天使につかまったんですか？」

「………」

絶句するしかなかった………きつと、今の自分の顔をカメラで取ったらさぞや面白い顔となっていることだろう。さらに言うならばいきなり敬語になった風華の顔は非常ににやりとしたものだった。見たものすべてが損をしてしまう………そんな顔だった。

「ぼ、僕を捕まえたのは天使だったんですか!？」

「おっと、話を替えようとしなさい！」

逃げられないように体重をかけ、両手で蒼疾の顔を押さえる。

「えっと、そ、そう見ないで下さい……照れてしまいますから……」

「そう?あたしは別にかまわんさ」

どうにかして逃げようとする蒼疾だが、体は動かないし、籠絡されてしまうのは時間の問題だろう。

「ほらほら、あたしの目をちゃんと見なさい！」

徐々に迫ってくるその可愛い顔に蒼疾の妄想は徐々に危ない方向へとスピードを高めていく。

「く、唇があたっちゃいます！」

「あたしはあんたみたいな外見の男の子好みだからだいじょーぶ！」

「が、外見で人を判断するのも……」

「中身もよわつちそうで素直でいぢめがいがあつてたまないわ!もう最高よ!といってさらに近づいてくる。

「……………」

蒼疾はここまでかとおもっていたのだが……………

「きやあああああああああああ!!!」

この世が裂けてしまうのではないかというほどの叫び声が二人の耳に入ってきたのであった。

「!?!」

「今のは!?!」

風華は扉を開けるとベッドでボーっとしていた蒼疾ににやりと笑う。

「鴨がネギしよってやってきた!!!」

「鴨?」

鴨ってあんな鳴き声するのか?と考えていた蒼疾の手を風華は掴む。

「さ、いくよ!」

「どこへ?」

扉の先には廊下なんてなく、そのまま一階……………ここが地上四階

だと今頃蒼疾は気づく……へと二人は飛び降りる。勿論、なれな
い蒼疾は叫んだのだった。
「ぎゃあああああああああああああああ……!!」

第四話 叫び声は奇声じゃないのか！

第四話

叫び声がした方向へ嬉々とした風華と死ぬような思い（飛び降り）をした蒼疾は疾走する。

「っと、間に合った……………蒼疾、奇声を発した子を助ける」

「え？」

「無双じゃあああ！！目指せ！最高コンボ！」

紅い剣のようなものを振り回しながら不良たちを蹴散らしていく風華。その顔はとても嬉しそうだった。

「え、えっと……………」

基本的に言われたことをやってしまう蒼疾はまだ会って間もないというのに風華の言ったことを実行したのだった。

「さ、僕の後ろに来て！」

「え？お、お兄ちゃん！？」

そんなことを言われたような気がしたのだが、蒼疾は叫び声を発した女の子を後ろへとかばう。

「こっちの男のほうが弱そうだぞ！」

「くっ……………」

不良の半分ほどが蒼疾のほうに殺到してくる。

「く、来るなら来てみる！」

「足が震えてるぜ……………くたばりなあ！！」

鉄パイプを振り上げ、不良は優越感に浸っていたのだが……………

……………

「……………覚悟するのはそっちのほうさ……………いやだねえ！こんな、くだらない相手をするのは……………覚悟、決めてくれよ？俺、手加減できないから……………」

「あ？」

振り下ろされたはずの鉄パイプは男が握っているところからすで

に地に落ちていたのだった。

多勢に無勢なのだが、例を例えるならばフル装備機兵士に素手の人間たちが押し寄せているような感じだっただろう。その圧倒的な戦力は涙ものだった。

「……………あれ？」

蒼疾も意識を取り戻し……………恥ずかしい話だが、蒼疾は気を失っていたのだった。

「蒼疾、助けた子は？」

不良の服をなれた調子で剥いでいきながらそんなことを尋ねてくる風華。

「えっと……………その、すみません……………気を失っていたみたいで……………」

「……………気を失っていた？あたしより嬉々として相手をボコボコにしていた蒼疾がよくいうわね……………ま、力に振り回されてるんだろうけどさ」

風華はくすねた財布をまとめて袋に入れると指を鳴らす。

「！？」

転がっていたはずの不良たちはすべて消えてしまったのだった。

「これは？」

「ちよつとしたマジック」

「どこに消えちゃったんですか？」

「あれ？さっき言わなかった？交番か警官がいるところ」

あゝすつきりしたと言って再び蒼疾の近くに立つ。

「蒼疾、血、出てるわよ？」

「え？」

「ほら、ここ……………」

ハンカチでほっぺを拭ってもらい、その仕草がいやに脳に焼きついた蒼疾だった。

「で、あの子はどこにいったのかな……………おーい！もう君に危害

を加えるような悪い子達は始末してあげたから出てきても大丈夫だよ。」

下心ありありな声を出しながらゴミ箱の中を探したりする。

「あり？いないな。」

「それはまあ………そんなところにはいないとおもいます。」

「蒼疾も早く探す！あんたがちゃんと見てなかったから悪いの！」

「……………はい、わかりました。」

上からものを言われるとこんな風になってしまっ自分を叱責しながらも半ばあきらめた調子で蒼疾も搜索を開始したのだった。

「いた？」

「いえ、いませんでした……………あの子、大丈夫ですかね？」

「ま、大丈夫なんじゃない？ここから出て行った可能性が大きいから。」

どうでもよさげにそんなことを呟いて彼女は蒼疾のほうを見る。

「で、どうするの？」

「どうするって？」

何がどうしたのだろうか？そうおもいながら蒼疾は考えた。

「あのねえ、自分の家に行きたいんでしょ？」

「あ、そうでしたね……………けど、もう深夜ですし……………」

不良たちも寝静まったのか（どっちかというと二人にボコボコにされた後に警察署に連れて行かれたのが大きい）静かになってしまった町の出入り口で彼らは話し合う。

「ま、邪魔になるわよね……………今日はあたしの家に止めてあげるわ……………さっきのところだけだね。ベッドはあたしと共同。どう？

嬉しいわよね？」

「……………ええ。」

何よ、その態度は？と笑いながら叩かれてこけそうになる蒼疾。

「えっと、お世話になりますね。風華さん。」

「気にしない気にしない……………ま、天界の連中の話もしてあげた

いし、さっきのことと詳しく教えたいからね……………」

どうやら蒼疾の聞きたいことはお見通しらしく、ちょっとまじめな顔で蒼疾に告げる風華。

「……………風華さん」

感激の念にとらわれた蒼疾だったが、次の瞬間には彼女の顔がにやりとした顔に変わっていた。

「勿論、この魅力的なあ・た・しのボディーもじかに教えてあげるわ」

「……………」

風華はそういつて体をくねらし、セクシーなポーズを蒼疾へと向ける……………だが、お世辞にもナイスバディーとは言いがたいその体を見ることなくアスファルトに咲いている花へとむける蒼疾。その表情はちよつと同情しているような感じだった。

「何よ、その物足りないって顔は！」

「え？い、いつてませんよ！」

思っただけです！というとしてあわてて口を閉じる蒼疾。そんな蒼疾を睨みつけていた風華が口を開く。

「まったく！失礼しちゃうわね……………ま、今日は許してあげるわ。疲れたし」

そういつて蒼疾の腕を掴むとねぐらである先ほどの部屋へと向かっていったのだった。

「……………そ、そんな……………おにいちやんがここにいるなんて……………」

……………」

そして、そんな二人のやり取りを見ていた一人の女の子が呆然と立ち尽くす。彼女はそのままこの町を出て行き、町は完璧な静寂をようやく迎えることが出来たのだった。

「ま、蒼疾が知りたいと思っていることがほかにないのならあたしは眠らせてもらうわよ？」

ふわぁ〜と大口開けてあくびを一発かますと隣の蒼疾を見る。

「……………ええ、ありがとうございます」

若干暗い顔になってしまった蒼疾の頭をくしゃくしゃにして風華は笑う。

「ま、眠れないかもしれないけどさ、そのときはあたしの顔を見て和んでて？」

「ええ、すみません」

じゃ、おやすみ」と彼女は言うてすぐにいびきをかき始める。

「……………」

蒼疾も彼女の隣に寝転ぶと静かにまぶたを閉じた。先ほどまで聞いていた話が頭の中を駆け巡っていたのだが……………となりで静かに寝ている風華を見ていると馬鹿らしくなってそのまま眠ってしまったのだった。

第五話 夢、覚めぬうちに

第五話

蒼疾は夢を見ている……………

折れた鉄パイプは悲しく音を立てて動かなくなる。

「んだ？お前？」

不良がぎよとして見る先には紅い光を放つ男が立っていた。

「俺か？俺は…………… お前らに絶望を届けに来た天使だ…………… 右手、右足…………… どこから折られたい？おっと、パイプを折ったのはデモン ストレーションだ」

そういつて今度は指を鳴らす。すると、不良たちが持っていた武器がすべて折れてしまった。

「どうだ？スプーン曲げて使えなくするよりも面白いだろう？」

にやりと不敵に笑い、舌なめずりをする。

「お、お兄ちゃん？」

蒼疾は振り向き、別に感情のこもっていない顔をする。

「あん？お前、椿だったのか？おっと、お前の知っている兄貴は俺が気絶させたからな……………」

「知ってる、お兄ちゃんは二重人格者だってことを……………」

「ああ、そうだったな…………… ま、そんなことはどうでもいいや……………」

「…邪魔だからひっこんどけ」

「う、うん……………」

近くのゴミ箱に隠れたのを確認すると蒼疾は一步踏み出し……………
「お？」

不良の目の前に立っており、一人の不良はその場に倒れ付した。

「…………… 妹を可愛がってくれたおかげだ…………… カクゴジャタリナイ、イチャカギリノアコムヲミセテヤル」

不敵に笑うと蒼疾は襲い掛かってきた相手たちを一撃のもとに倒

していく……………近くでは風華が踊るようにして相手を倒しているが、それよりもすごかった。

「ひいつ……………」

「……………ラスト、残念だったな。最後の奴はいたぶって気絶させてやるぜ？まずは足をこしょぐってやろう」

縄でぐるぐるにされて動けなくなつた不良は靴を脱がされ、くすぐられたのだった。

「ぎゃ、ぎゃははは……………」

「どうだ？苦しいだろう？苦しいよな？その苦しそうな顔、最高だぜ？」

嬉々とした表情で不良の足の裏をくすぐっている蒼疾……………だが、すぐに相手は涙を流しながら気絶してしまった。

「ったく、面白くねえ奴だ……………おっと、そろそろあいつが意識を回復するか……………」

「うわああああ！！！」

絶叫しながら目を覚ます蒼疾。

「おっと、今お目覚めかい？相当うなされていたみたいだけど……………」

「あ、風華さ……………」

風華は何も纏っていなかった。そういうのを見慣れていなかった（いや、本とかでは見たことがあるのだが）蒼疾はあわてて目を瞑る。

「す、すいませんでしたっ！！！」

「あ、ちよつと蒼疾！」

走り出した蒼疾はあわてて部屋を出ようとしたのだったが……………

「う、うわああああああつ！！！」

朝っぱらから彼は地上四階から飛び降りるハメとなつたのだった。

「……………アンノウン・エンジェルって丈夫なんですね？」

怪我も何もしなかった自分の体を触りながら手渡された朝食のトーストを口に入れる蒼疾。

「まあね、馬鹿みたいに強いわよ。それこそ、三人ぐらいいれば世界を征服できるレベルね。」

成る程、それならば不良が街単位で襲ってこようがらくらくと対処できるわけである。

トーストを塗りながら露出の多い服を着る。その体型から色気を感じるというより元気のいい娘みたいな印象を受ける。

「え、えつと……もう一回どういったものか聞いて構いませんか？」

着替えをしている風華を極力見ないようにしてトーストを口に無理に頬張る蒼疾。その顔がちりちりと風香を見ていたりする。

「アンノウン・エンジェル……もうめちゃくちゃ前に神様が天使と悪魔の争いを止めるために新たに作り出した存在ってことになってるわ……戦闘能力は計り知れず、戦うためだけに言ったらおかしいから戦いが得意な天使ね。あ、だからと言って自分から争いは起こさないのが多いわね……あたしもそういう温厚な性格よ。」

自ら不良どもをボコボコにしているのが温厚なのか？と思ったのだが蒼疾は話の腰を折るのをやめた。

「アンノウン・エンジェルがどういった経緯で出来たかは知らないけど……普通の天使がなれたりもするそうよ？まあ、これはあたしたちには関係ないけどさ……。」

ここでこの説明はおしまいつといて蒼疾にたずねる。

「大丈夫？復習できた？」

「え？ま、まあ……。」

本当のところは着替えをちら見していたのでぜんぜんなのだがその点は昨日はなしてくれていたときに完璧に覚えた……というより、前から知っていた感覚だった。

「それで、次は天界のことだったわね？」

「ええ、そっちは全然です。」

どういったものかさっぱり理解できない。

「天界ってのは神界、天界、人間界、魔界、魔王界の五つの界の一つね？どこにあるのかわかんないんだけど、白いトイレに向かって天使が話しかけると扉が開くのかな？逆もまたしかりね」

とても簡単に扉が開くというのがおかしいことだったのだが、なるほど、この方法ならば人間が迷い込んだり、天界に行った人間がこちらには戻ってこれない。

「あたしが天界について知っていることはこの程度ね」

「……まあ、充分だとは思いますがね」

そう言って蒼疾は立ち上がる。

「家に向かうの？」

「ええ、まあ……短い間でしたが、お世話になりました」

下げた頭を上げると、座っていたはずの風香も立っていた。

「……あたしもついていくわ」

「え？」

「……ちよつと、気がかりがあつてね」

さ、行くわよ？と彼女は言うときよんとしている蒼疾の腕を掴むと風香だと本日一回目、蒼疾だったら本日二回目の飛び降りを行したのだった。

静かな家の前に立ち並ぶ二人……

「家、空き家になってますね」

売りに出されている我が家を前にして愕然としている蒼疾。

「まあ、一年以上経ってるからね」

「……僕の間感としては一日二日ですよ……」

まあ、そうねと彼女は呟いて携帯を取り出す。

「ふんふん、成る程……」

携帯でどこにかけて話をしているようだった。隣では膝を突いて愕然としている蒼疾は何も考えることが出来なかった。

「……さ、蒼疾……はいるよ」

「はいるって？」

死んだような目をした蒼疾を無理やり立たせ、顔を掴む。

「ここに！」

「は、はいっ！！」

よろしいと呟いて従えて家の中へと入る。

第六話 THE END（前書き）

事情があつて今回で終わりました、すみません。

第六話 THE END

第六話

家の中をあらかた見てまわった風華は未だに蒼疾を引き連れていたままだった。

「ふうん、なかなか広いわね？お風呂も二人ちょうど入れるサイズだわ」

「ええ、まあ……って、どういう意味ですか？…それに、もう、僕の家じゃありませんけど？」

悲しげに言う蒼疾に軽い調子で風華は答える。

「まあね、これからあたしたちの家だわ」

「そうですね……と蒼疾は呟いたが次の瞬間には風香の肩を掴む。「あら？あたしにとぅとぅ振り返ってくれた？お姉さん、そんなに見られると困っちゃうわ」

「そ、そんなことより……あたしたちの家ってどういうことですか！」

詰め寄る蒼疾に風香はため息をつくようにして答える。

「……あのねえ、別にあんたの両親はその気になれば探せるわ。それより、家を失ったあんた、どうするの？ダンボールで暮らす？それもまた一つのお話があって面白そうね？」

計画性のない突拍子の言葉が一番危なくて身を滅ぼしやすい要素なのよ！とそういつて返答を待つが、蒼疾はぼそぼそと呟くしかない。

「う……それは……」

そんな言葉は聞きたくないとばかりに風華は一方的に告げる。

「とりあえず、この家を借りる！そして、それからあんたの両親を探せばいいわ」

「で、でも僕お金持っていないし……」

再び外へとやってくる風華と蒼疾。彼らの前に車が一台止まって

家財道具一式を入れ始めたのだった。

「だ・か・ら！あたしもここに住むのよ！あたしがお金を出してあげる代わりに蒼疾は家事ね？はい！けつてゝ！」

そういつて空き家と書かれていた紙をはがし、家財道具を家の中に入れ始める白い人たちの一人が彼女に表札を渡す。

「どうぞ、お嬢様」

「お、お嬢様！？」

驚く蒼疾をさらりと無視して風華はお手伝いさんにすばやく答える。

「ん、ありがとう……ああ、メイドを一人雇っておいて……新人、よろしくね」

「かしこまりました」

家財道具を入れ終えた白い服たちの人たちはあつという間に去っていったのだった。

「まあ、何も考えないでゆるとたまには生活してみたら？」

ぽんぽんと蒼疾の肩を叩いてそんなことをいう。蒼疾は首をかしげながらも風華のほうに向き直って念を押すようにたずねる。

「……………いいんですか？」

「いいのいいの！気にしない気にしない！天使の施しは万人のためにあるのよ」

ニコニコといった調子で蒼疾の肩をしばしと叩く。

「さあ、年越しの準備をしないとね？」

「……………そうでしたね」

今思えば既にクリスマスも終わっており、感覚は未だに夏なのだが季節ではもうそろそろでこの年も終わってしまう。

「さ、行くわよ」

「どこへ？」

「ショッピングよショッピング！」

蒼疾の腕を抱きしめるようにして風華は歩き始める。

「あの男、絶対に尻にしかれてるわ」

街中、そんな声が蒼疾の耳に入ってくるが、彼の頭の中は腕に当たっているやわらかいものに意識がいついていてそれどころではなかった。

「……………」

「何そんなにがちがちになってるの？」

「だ、だって……………その、嬉しいんだか、はずかしいんだか……………」

「…」

混乱する蒼疾に彼女は告げる。

「実はね、この話……………今日で終わり！」

「ま、まじっすか!？」

「うん、正確に言っと、次の行でエンド！」

〈END〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0299e/>

アンノウン・エンジェル ～紅八蒼ヨリ赤シ～

2010年10月8日15時36分発行